

中国語を母語とする上級日本語学習者における 中日同形同義語・異義語の聴覚的認知

— 日本語漢字単語の語彙判断課題による実験的検討 —

費 曉東・徐 婕・趙 静・西本淳一郎

吉村 瑞希・徐 芳芳・松見 法男

Auditory Recognition of Chinese–Japanese Cognates and Homographs in Proficient Chinese Learners of Japanese: An Experimental Test Using Lexical Decision Task on Japanese Kanji Words

Xiao-dong FEI, Jie XU, Jing ZHAO, Junichiro NISHIMOTO
Mizuki YOSHIMURA, Fang-fang XU, Norio MATSUMI

キーワード：中国人上級学習者、同形同義語・異義語、音韻類似性、語彙判断課題、心内辞書

1. はじめに

中国語を母語 (native language: first language とほぼ同義として以下、L1) とする日本語学習者 (以下、学習者) は、中国語と日本語 (以下、中日) の同形同義語 (cognates)¹⁾ や同形異義語 (homographs) を耳で聞いたとき、それらをどのように処理しているのであろうか。本研究では、この問題を扱う。

中日の漢字単語には、同形語が多く存在する (e.g., 松見・邱・桑原, 2006; 蔡, 2009; 胡, 2012)。中国語を L1 とする学習者が第二言語 (second language: 以下、L2) である日本語の漢字単語を見たときは、「形が同じであるから音も意味も同じである」と考え、誤った解釈に至ったり、中国語で読むことにより日本語音が定着しなかったりすることがある (e.g., 費・松見, 2012)。中国語を L1 とする学習者は、同形語の学習において、他の言語を L1 にもつ学習者よりも困難さを経験することが予想される。

従来の研究を概観すると、2つの検討すべき点が浮かび上がる。1つ目は、中日の同形同義語と同形異義語を比較した研究がほとんどないという点である。これまでは、同形同義語や非同形語 (non-cognates) を対象とし、中日間の形態・音韻類似性を扱った研究が多かった (e.g., 蔡・松見, 2009; 蔡・費・松見, 2011; 松見・費・蔡, 2012)。同形語でも、単語の意味が中日でずれる場合があり、それらの処理過程がどのようにになっているかを解明することが求めら

れる。この問題については、視覚呈示の事態を用いた実験的検討 (e.g., 金城, 2011) が始まっているが、未だ聴覚呈示の事態を用いた研究は見当たらない。学習者は同形語を耳で聞くことも多く、その際の意味処理過程を明らかにする必要がある。これが、検討すべき点の2つ目である。

本研究では、中日の同形同義語と同形異義語について、心内辞書 (mental lexicon) モデルを枠組みとし、聴覚呈示される日本語単語の音韻表象 (phonological representation) から概念表象 (conceptual representation) へのアクセス過程で、中国語の意味に関する概念表象や中国語の音韻表象がどのようにかわるかを調べる。その際、同形語の種類とともに、中日の音韻類似性をも要因として操作し、実験的検討を行う。

2. 問題と目的

近年、中日の同形同義語や非同形語の処理過程に関する研究が盛んに行われている。蔡・松見 (2009) は、同形同義語と非同形語の処理過程について、言語間プライミング法 (intra-lingual priming method) を用いた検討を行った。その結果、同形語は非同形語よりも反応時間が短いことがわかった。中日で形態類似性の高い単語は、2言語間で形態表象が共有されていることが示された。また、蔡他 (2011) は、同形同義語と非同形語における形態情報の類似性に加え、音韻情報の類似性を操作した実験を行った。

その結果、音韻類似性の高い単語は、形態類似性の高い単語とは異なり、中日の2言語間でその表象(音韻表象)が分離・独立していることがわかった。これらの研究の結果をふまえ、松見他(2012)は、中国語をL1とする学習者の心内辞書モデルを考案した(図1を参照)。このモデルは、中日2言語間の語彙(形態・音韻)表象と概念表象の相互関係を明らかにした点が優れている。ただし、このモデルでは、概念表象内の中日の意味の違いについては議論されていない。中日の同形異義語について、語彙表象と概念表象がどのような関係になっているかは明らかにされていないと言える。

同形異義語を対象とした金城(2011)と費(2014)の研究は、この点について、有益な示唆を与えてくれる。

金城(2011)は、中日の同形同義語と同形異義語を取り上げ、視覚呈示事態における翻訳再認課題と(translation recognition task)と口頭翻訳課題(oral translation task)を用いて、それらの処理過程を調べた。実験の結果、単語の形態表象から概念表象へのアクセス過程では、中国語の意味に関する概念表象が自動的に活性化し、日本語の意味処理に干渉が生じることが明らかとなった。同形異義語の形態表象と中国語に関する概念表象との連結が強いことが示された。すなわち、概念表象内では、同形異義語がもつ2つの意味が活性化し、競合が生じることがわかった。

金城(2011)の研究は注目に値するが、他方において、その結果が課題に依存したもの(depend on task)であることを推察させる。翻訳課題は、学習

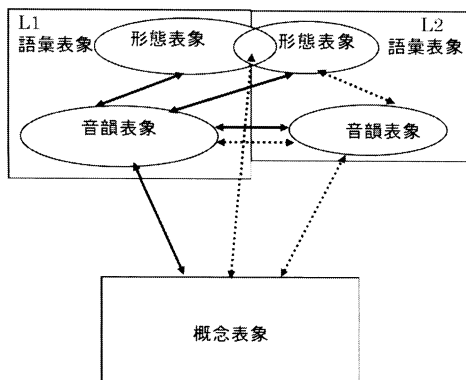


図1 中国語をL1とする日本語学習者の心内辞書モデル(松見他, 2012より引用, 一部改変)

者に単語の意味の産出を求める課題であり、両言語にかかわる概念表象を意識的に活性化させる課題である。したがって、厳密には、中国語の意味に関する概念表象が「自動的に」活性化したのではなく、半ば「強制的に」活性化したと解釈すべきであろう。「自動的」とは本来、学習者が意識せずに遂行する過程を含むので、概念表象の自動的な活性化を考察の論点にする場合は、一方の言語が呈示され、他方の言語が「自動的に」活性化するか否かをみる語彙判断課題(lexical decision task)の実験を行う必要がある。

このことを考慮したのが、費(2014)である。費(2014)は、中国国内の中級学習者を対象に、語彙判断課題を用いて、聴覚呈示の事態における中日の同形同義語・異義語の処理過程を検討した。同形語の種類に加えて、金城(2011)では操作されなかった音韻情報の類似性を要因として設定し、実験を行った。その結果、視覚呈示の事態(金城, 2011)と同様に、同形異義語は同形同義語よりも反応時間が長いことがわかった。聴覚呈示においても、中国語の意味による干渉がみられ、中国語に関する概念表象が自動的に活性化することが示された。費(2014)は、同形異義語において、音韻類似性の高い単語の反応時間が長くなるという、音韻類似性の抑制効果も見出し、日本語の音韻表象と概念表象との連結が弱いことを明らかにした。

中日の同形異義語では、語彙表象でも概念表象でも、一方の言語が呈示されると他方の言語も自動的に活性化すると考えられるが、この現象は、日本に留学している上級の学習者でもみられるのであろうか。日本留学中の上級学習者は、日常生活における日本語の処理経験が豊かである。その経験量に応じて、日本語単語の音韻情報と意味情報の連合が強くなる。すなわち、心内辞書における音韻表象と概念表象の連結が強化されると考えられる。よって、上級学習者では、費(2014)とは異なる結果がみられる可能性がある。本研究ではこの観点に立ち、日本語の習熟度の違いによって、中日の同形同義語・異義語の聴覚的な処理過程が異なるか否かを明らかにする。

実験では、費(2014)に準じて、同形語の種類と音韻類似性を要因として操作し、聴覚呈示の事態における語彙判断課題を採用する。実験仮説は、以下のとおりである。

【仮説1】 学習者が同形異義語を処理する際は、中国語の意味に関する概念表象が活性化する(e.g., 金城, 2011; 費, 2014)ので、同形異義語は同形同

義語よりも反応時間が長くなるであろう（仮説1-a）。また、日本留学中の上級学習者を対象とした費（2013）では、音韻類似性の抑制効果が報告されているため、本研究においても、音韻類似性の高い単語は低い単語よりも反応時間が長くなるであろう（仮説1-b）。

【仮説2】日本留学中の上級学習者では、日本語の音韻表象と日本語の概念表象との連結が強い（e.g. 長野・松見, 2013; 費, 2013）ので、音韻類似性の低い単語においてのみ、同形同義語が同形異義語よりも反応時間が短くなるであろう（仮説2-a）。また、日本留学中の上級学習者を対象とした費（2013）では、同形同義語において音韻類似性の抑制効果がみられたため、本研究においても、同形同義語では、音韻類似性の高い単語は低い単語よりも反応時間が長くなるであろう（仮説2-b）。

本研究の目的は、上記の仮説1と仮説2を検証することである。

3. 方法

3.1. 実験参加者

中国語をL1とする上級の日本語学習者22名（女性16名、男性6名）であった。全員が中国の大学で日本語を主専攻として学習した大学生であり、日本に留学する前に、すでに日本語能力試験N1級を取得していた。本実験に参加した時点で、全員が日本の大学で留学生生活を送っていた。日本滞在期間は半年から7年半であり、日本語学習期間は4年半から8年であった。

3.2. 実験計画

2×2の2要因計画を用いた。第1の要因は同形語の種類であり、同義語と異義語の2水準であった。第2の要因は音韻類似性であり、高・低の2水準であった。2つの要因ともに参加者内変数であった。

3.3. 材料

国際交流基金（2002）の3, 4級単語リストの中から、すべての単語を選定した。当銘・費・松見（2012）の音韻類似性の調査資料をもとに、形態・音韻類似性の高・低に基づき、「音韻類似性が高い同形同義語」、「音韻類似性が低い同形同義語」、「音韻類似性が高い同形異義語」、「音韻類似性が低い同形異義語」について、それぞれ14個、計56個を選定

した。各種類の単語は、天野・近藤（2000）の資料にもとづいて出現頻度を統制した。4種類の単語の出現頻度について、平均頻度を算出し、分散分析を行った結果（本研究では、有意水準をすべて5%に設定した）、単語の条件間で有意差は生じなかった（ $F(3, 52)=0.10, p=.959, \eta^2=.01$ ）。4種類の単語の出現頻度はほぼ等質であるとみなされた。非単語については、単語条件とほぼ同様に、4種類の計30語を用いた。表1に、実験で使用した単語と非単語の例を示す。

単語の音声刺激については、日本語の教師経験をもつ女性（東京方言話者）に録音を依頼し、その音声を聴覚呈示用に編集した。

3.4. 装置

実験プログラムは、SuperLab Pro（Cedrus 社製 Version 4.0）を用いて作成された。実験では、パーソナルコンピュータ（SOTEC PC-R502A5）と周辺機器、ヘッドホンが用いられた。

3.5. 手続き

実験は個別に行われた。本試行の前に練習試行が7試行、行われた。実験参加者は、呈示された音声日本語の単語として実際に存在するかどうかを、できるだけ速く正確に判断するように教示された。日本語に存在すると判断した場合はYesキーを、

表1 実験で使用された材料の例

単語の例 (Yes 反应用)			
同義同音	教室	異義同音	新聞
	空気		趣味
	漫画		丈夫
同義異音	学校	異義異音	手紙
	交通		約束
	生活		家族
非単語の例 (No 反应用)			
面臨 (めんりん)		登陸 (とうりく)	
理出 (りしゅつ)		円役 (えんやく)	

日本語に存在しないと判断した場合はNoキーを、それぞれ押すように教示された。単語の聴覚呈示開始から実験参加者がキーを押すまでの時間が、反応時間として自動的に計測された。

1試行の流れを図2に示す。音声が出る合図としてパソコン画面に注視点が500ms呈示された後、500msの空白において日本語の単語が聴覚呈示された。単語の呈示時間は最大5000msで、この間に実験参加者の反応がある場合、および反応がなく5000msが経過した場合は、2000msの間隔において次の試行に移った。単語はすべて、コンピュータのプログラムによってランダムに呈示された。

本試行終了後、未知単語のチェックおよび実験参加者の言語学習歴に関する筆記回答式の調査が行われた。

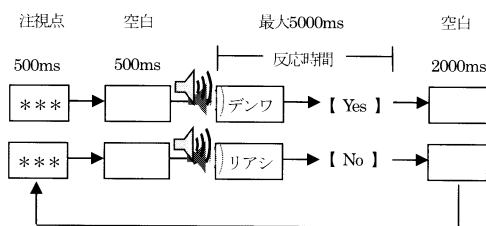


図2 実験における Yes/No 試行の流れ

4. 結果

分析対象はYes試行の正反応時間のみであった。各実験参加者における誤答、無答、未知単語に対する反応は分析対象から除外された。各条件の正反応について平均正反応時間及び標準偏差(SD)を求め、平均正反応時間 $\pm 2.5SD$ から逸脱したデータは外れ値として分析対象から除外された。除外率は19.07%であった。

各条件の平均正反応時間(図3を参照)について2要因分散分析を行った結果、同形語の種類の主効果が有意傾向であり($F(1, 21)=3.23, p=.087, \eta^2=.01$)、同形同義語は同形異義語よりも反応時間が短い傾向がみられた。音韻類似性の主効果は有意ではなかった($F(1, 21)=0.20, p=.659, \eta^2=.00$)。同形語の種類 \times 音韻類似性の交互作用が有意であった($F(1, 21)=4.73, p=.041, \eta^2=.01$)ので、単純主効果の検定を行った。その結果、音韻類似性の低い単語において、同形同義語が同形異義語よりも反応時間が短く($F(1, 42)=7.80, p=.009, \eta^2=.02$)、音韻類似性の高い単語において、同

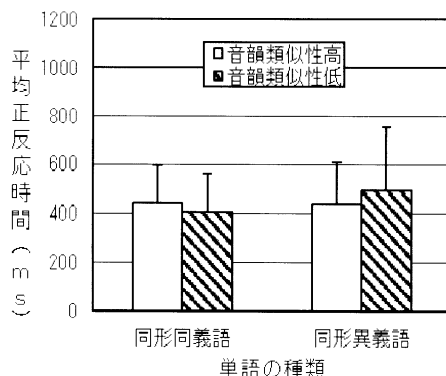


図3 実験の各条件における平均正反応時間及び標準偏差

形同義語と異義語の間に有意差はみられないこと($F(1, 42)=0.02, p=.893, \eta^2=.00$)がわかった。同形異義語においては、音韻類似性の高い単語が低い単語よりも反応時間が短い傾向($F(1, 42)=2.88, p=.097, \eta^2=.01$)にあり、同形同義語においては、音韻類似性の高い単語と低い単語の間に有意差がみられないこと($F(1, 42)=0.88, p=.325, \eta^2=.00$)がわかった。

なお、各条件における誤答率を算出し、逆正弦変換した値(表2を参照)について、反応時間と同様に 2×2 の2要因分散分析を行った。その結果、形態類似性の主効果($F(1, 21)=0.17, p=.687, \eta^2=.00$)、音韻類似性の主効果($F(1, 21)=0.18, p=.676, \eta^2=.00$)、形態類似性 \times 音韻類似性の交互作用($F(1, 21)=1.24, p=.279, \eta^2=.01$)は、いずれも有意ではなかった。誤答率に関する以上の結果から、いずれの条件間でも、反応時間が短い条件で誤答率が高く、逆に反応時間が長い条件で誤答率が低いという、トレードオフ(trade-off)現象は生じなかったといえる。したがって、本実験の反応時間には、課題遂行に要する時間の相対的な長短が反映されていると考えられる。

表2 各種類の単語の誤答率及び標準偏差

	同義同音	同義異音	異義同音	異義異音
誤答率	6.65	4.53	6.09	6.80
(SD)	(8.10)	(7.52)	(10.23)	(9.37)

5. 考察

本研究では、日本留学中の上級学習者を対象に、中日同形同義語・異義語の処理過程を検討した。聴

覚呈示の事態による語彙判断課題を採用した実験の結果、同形異義語の中国語の意味による干渉効果が生じ、仮説1-aは支持された。音韻類似性による促進の効果も抑制の効果も生じなかったため、仮説1-bは支持されなかった。中級学習者の実験の結果と比較し、本研究における上級学習者の同形異義語の処理過程を考察する。

まず、同形語の種類による効果について考察する。中国国内の中級学習者（費，2014）を対象とした実験では、音韻類似性の高い単語でL1の意味による干渉がみられたが、日本留学中の上級学習者を対象とした本研究では、音韻類似性の低い単語でL1の意味による干渉がみられた。仮説2-aが支持されたといえる。同形異義語の聴覚的認知におけるこの相異は、次のように考察できる。中級学習者では、音韻類似性の高い単語は、日本語の音韻表象から中国語の音韻表象を経由して概念表象に意味アクセスするため、L1である中国語に関する概念表象が活性化し、単語の意味判断において干渉を起こす可能性が高い。しかし、本研究の上級学習者では、音韻類似性の高い単語は日本語音と意味との連結が強くなり、日本語の音韻表象から直接に日本語の概念表象に意味アクセスするため、中国語に関する概念表象は活性化されず、干渉は生じない。他方、音韻類似性の低い単語は、中日に共有された形態表象を経由して（換言すれば、日本語音から漢字の形態が想起された後に）概念表象に意味アクセスするため、中国語に関する概念表象も活性化し、意味判断において干渉が生じる。

次に、音韻類似性による効果について考察する。中級の学習者を対象とした費（2014）では、同形異義語において、音韻類似性による抑制効果がみられたが、上級の学習者を対象とした本研究では、同形異義語において、音韻類似性による促進効果がみられた。仮説2-bは支持されなかったといえる。中級の学習者においても、上級の学習者においても、同形同義語の場合に音韻類似性の効果がみられなかったのは、中日同形語の処理では、学習者が日本語音を聞いて迅速に単語の形態情報を想起し、形態表象から直接に概念表象に意味アクセスする可能性が高いことを意味する。同形同義語は中日2言語間による意味の差異がないため、音韻類似性が高い単語の中国語の音韻表象が活性化される前に、単語の意味判断はすでに完了してしまっただけで推察できる。一方、中級の学習者においても、上級の学習者におい

ても、同形異義語の場合に音韻類似性の効果がみられたのは、学習者が同形異義語を処理する際、日本語の音韻表象から中国語の音韻表象を経由して概念表象に意味アクセスした可能性が高いことを意味する。中級の学習者では、日本語の音韻表象と日本語に関する概念表象の連結は、中国語の音韻表象と中国語に関する概念表象の連結よりも弱く、活性化した中国語の音韻表象を経由することによって、抑制の効果が生じたと解釈できよう。上級の学習者では、日本語の音韻表象と日本語に関する概念表象との連結が強くなり、さらに、中国語の音韻表象を経由して活性化した中国語に関する概念表象が単語の日本語の意味処理にプラスの影響をもたらしたと解釈できよう。ただし、この解釈については、推測の域を出ないため、今後、さらに検証実験を行う必要があろう。

中級の学習では、同形異義語において音韻類似性の抑制効果がみられたのに対し、上級の学習者では、同形異義語において音韻類似性の促進効果がみられた。何故そのような相違が生じたのだろうか。本研究では、その可能性の一つとして、以下のように言及しておきたい。

当銘（2014）は、同形異義語の意味と日本語の意味の関連性、すなわち、意味的関連性（semantic relatedness）²⁾ という観点から、同形異義語の処理過程を検討した。同形異義語に属する単語は、中日2言語間で意味関連性が高い場合と関連性が低い場合とでは、処理過程が異なることが示唆された。意味関連性が高い単語は、中国語に関する概念表象と日本語に関する概念表象が強くなり結びついているため、L1の意味の活性化がL2の意味処理に影響を及ぼすことを見出した。本研究では、同形異義語の中日2言語間の意味関連性は操作されておらず、意味関連性が高い単語と低い単語の両方が扱われていた。中級の学習者と上級の学習者では生じた音韻類似性の効果の相違は、意味関連性の高低に起因する可能性がある。この点について、先行研究をふまえ、慎重に議論を進める必要があると考えられる。

同形語の種類による効果においても、音韻類似性による効果においても、先行研究（費，2014）と本研究では異なる結果が観察された。中国語をL1とする学習者では、日本語の処理経験が豊かになるにつれて、聴覚呈示による同形異義語の処理過程が変容することが明らかになったといえる。この点について、同形同義語と非同形語を対象とした先行研究

(e.g. 長野・松見, 2013; 費, 2013)と同じ見解である。

最後に、同形語の処理過程では、心内辞書内における活性化について考察する。同形同義語は、中日2言語間で1つの意味しかないため、その処理過程においては、主に2言語間の形態表象と音韻表象の活性化が、単語の反応時間に影響を及ぼすと考えられる。それに対し、同形異義語は、1つの形態について、中日で2つの意味があるため、その処理過程においては、形態表象と音韻表象だけでなく、概念表象の活性化も、単語の反応時間に影響を及ぼすと考えられる。では、同形異義語の処理過程においては、それぞれの表象がどのように活性化するのだろうか。本研究の結果から、特に中日2言語に関する概念表象はどのように活性化しているのか、すなわち、同形異義語の処理過程に関する心内辞書モデルを提案することは難しい。そこで、本研究では、心内辞書内における各表象の活性化のパターンについて言及し、どの経路が最初に使われているのか、すなわち、どの表象とどの表象の間の連結が一番強く単語の反応時間に影響を及ぼすのかについて、その可能性を述べる。

1つめは、「語彙(形態・音韻)表象が先に活性化し、その後は概念表象が活性化すること」である。単語の日本語音の入力から、迅速に中国語の形態表象、あるいは音韻表象が活性化し、活性化したそれらの表象を経由して概念表象に意味アクセスする。概念表象が活性化することによって、中国語の意味が日本語の意味処理に影響を及ぼす。2つめは、「概念表象が先に活性化し、その後は語彙(形態・音韻)表象が活性化すること」である。中日2言語間で意味一つしかない同形同義語とは異なり、単語の音韻入力から、迅速に中国語か日本語、場合によって両方の言語に関する概念表象が活性化することは否定できないであろう。概念表象が活性化した後、単語の形態と音韻情報に関する表象が活性化することによって、単語の処理に影響を及ぼすと考えられる。この2つの処理パターンの違いは、語彙表象と概念表象の活性化の度合にあると推察できる。つまり、語彙表象の活性化の度合よりも、概念表象の活性化の度合が大きいのであれば、2つめの処理パターンが成立する可能性が高いといえよう。この2つの可能性について、今後、基礎実験を重ねることによって検証する必要がある。これらのことを今後の課題として提示する。

また、本研究では、学習者の日本語習熟度が変わることによって、同形異義語の処理過程が変容することが実証された。日本語の習熟度は、中級の学習者(費, 2014)と日本留学中の上級学習者(本研究)の中間に位置づけられる。中国国内の上級学習者において、どのような処理過程がみられるのだろうか。今後は、中国国内の上級学習者を対象とした実験を行い、中日同形語の聴覚的認知の様相をさらに解明する必要がある。この点も今後の課題の1つとして提示する。

これらの課題での問題点を明らかにすることによって、図1で示されている心内辞書モデルのように、中日同形異義語に関する心内辞書モデルを考案することができよう。そのようなモデルを提案することは、言語心理学の分野においても、言語教育の分野においても、意義があると言える。

注

1) 同形同義語は、中国語と日本語の2言語間で形態も意味も同じ単語のことである。従来の研究では、「同根語」という用語を用いることが多かった(邱, 2002, 2003)。同根語の定義では、単語の形態情報しか考慮されておらず、音韻情報については言及されていない。一方、近年の研究では、単語の形態情報だけでなく、音韻情報をも考慮して議論がなされている。そこで、「形態類似性が高い単語」という用語が用いられている。本研究では、音韻類似性も操作しているため、同形同義語は形態類似性が高い単語とほぼ同義として扱うことにする。

同様に、本研究では、「非同形語」という用語は、「非同根語」ではなく、「形態類似性が低い単語」として扱う。すなわち、非同形語は、中日2言語間で形態は異なる(類似性が低い)ものの、意味が同じ単語のことを指す。

2) 意味的関連性は、単語の中国語の意味と日本語の意味がどの程度関連しているか、という指標である。例えば、「新聞」は中国語では「ニュース」という意味であり、日本語の意味である「ニュースペーパー」と比べ、中日2言語間の意味はお互いに似たようなカテゴリーに属する。それに対して、「迷惑」は中国語では「迷う」という意味であり、日本語の意味である「人のしたことで不快になったり困ったりすること(さま)」と比べ、

2言語間で全く異なるカテゴリーに属することになる。

事前調査では、学習者に中日同形異義語と、その同形異義語の日本語の意味を中国語に翻訳したものをそれぞれ並べて視覚呈示し、2つの意味が関連しているかどうかを、「7：非常に関連している～1：まったく関連していない」の7段階で評定させた。この意味的関連性の高低は、学習者の平均評定値による。

引用文献

- 天野成昭・近藤公久 (2000). 『NTT データベース シリーズ 日本語の語彙特性 文字単語親密度』三省堂
- 蔡 鳳香 (2009). 「中国人上級日本語学習者の日本語漢字単語の処理過程一文の先行呈示事態における検討一」『広島大学大学院教育学研究科紀要 第二部 (文化教育開発関連領域)』58, 205-212.
- 蔡 鳳香・松見法男 (2009). 「中国語を母語とする上級日本語学習者における日本語漢字単語の処理過程一同根語と非同根語を用いた言語間プライミング法による検討一」『日本語教育』141, 13-24.
- 蔡 鳳香・費 曉東・松見法男 (2011). 「中国語を母語とする上級日本語学習者における日本語漢字単語の処理過程一語彙判断課題と読み上げ課題を用いた検討一」『広島大学日本語教育研究』21, 55-62.
- 費 曉東 (2013). 「日本留学中の中国人上級日本語学習者における日本語漢字単語の聴覚的認知一中日2言語間の形態・音韻類似性を操作した実験的検討一」『留学生教育』18, 35-43.
- 費 曉東 (2014). 「中国語を母語とする中級日本語学習者における中日同形語の聴覚的認知一語彙表象と概念表象の活性化の視点から一」『2014年度日本語教育学会春季大会予稿集』327-328.
- 費 曉東・松見法男 (2011). 「中国語を母語とする中級日本語学習者における日本語漢字単語の聴覚的認知一中日2言語間の形態と音韻の類似性を操作した実験的検討一」『2011年度日本語教育学会秋季大会予稿集』273-274.
- 費 曉東・松見法男 (2012). 「中国語を母語とする上級日本語学習者における日本語漢字単語の聴覚的認知一中日二言語間の形態・音韻類似性による影響一」『教育学研究ジャーナル』11, 1-9.
- 胡 曉睿 (2012). 「漢字の音読みの習得に及ぼす母語の影響一中国人日本語学習者の場合一」『明海日本語』17, 93-102.
- 茅本百合子 (1995). 『日本語漢字の読みと及ぼす母語の音韻情報の影響一中国語母語話者の場合一』平成6年度広島大学大学院教育学研究科修士論文 (未公刊)
- 金城盛之 (2011). 「中国語を母語とする日本語学習者における中日同形異義語の処理一中国語の意味表象活性化の視点から一」『2011年度日本語教育学会第10回中国地区研究集会予稿集』21-25.
- 国際交流基金 (2002). 『日本語能力試験出題基準改訂版』凡人社
- 邱 學瑾 (2002). 「台湾人日本語学習者における日本語漢字熟語の処理過程一日・中二言語間の同根語と非同根語の比較一」『広島大学大学院教育学研究科紀要 第二部 (文化教育開発関連領域)』51, 357-365.
- 邱 學瑾 (2003). 「台湾人日本語学習者の日本語漢字熟語の音韻処理について一単語タイプ・単語の習得年齢・習熟度の観点からの検討一」『日本語教育』116, 89-98.
- 松見法男・邱 學瑾・桑原陽子 (2006). 「語彙の習得」縫部憲憲 (監修)・迫田久美子 (編著)『講座・日本語教育学 第3巻 言語学習の心理』第3章 2節 (pp.161-183), スリーエーネットワーク
- 松見法男・費 曉東・蔡 鳳香 (2012). 「日本語漢字単語の処理過程一中国語を母語とする中級日本語学習者を対象とした実験的検討一」畑佐一味・畑佐由紀子・百濟正和・清水崇文 (編著)『第二言語習得研究と言語教育』第1部 論文2 (pp.43-67), くろしお出版
- 長野真澄・松見法男 (2013). 「中国語を母語とする上級日本語学習者の日本語漢字単語の処理過程一日本留学中の学習者を対象とした語彙判断課題, 読み上げ課題による検討一」『広島大学日本語教育研究』23, 33-40.
- 当銘盛之 (2014). 「中国語を母語とする日本語学習者いにおける中日同形異義語の処理過程一語彙判断課題による検討一」『2014年度日本語教育学会春季大会予稿集』323-324.
- 当銘盛之・費 曉東・松見法男 (2012). 「日本語漢字二字熟語における中国語単語との音韻類似性の調査一同形同義語・同形異義語・非同形語を対象として一」『広島大学日本語教育研究』22, 41-48.